

# 結草

kusamusubi

No.24

Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa  
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2018.02.01

## 聖徳皇のめぐみにて

鈴木大拙館館長 木村 宣彰

木村でございます。皆さんよくお参りくださいました。お彼岸のお中日にこうして浄光寺さんのお太子さんのご縁にあわせていただきて本当にありがとうございます。今年は十五年目のご縁となるわけですが、いつも申し上げるのですけれども、こうして法要とか聴聞というのは心構えがとても大切です。ある人からこのように教えていただきました。今日の聴聞は今生で初めてはわたくし一人のための法要だと思いなさい。今日の聴聞は今生で最

後の聴聞だと思いなさい。そういう気持ちで聞いて下さいと教えられ、なるほどなと思いましたね。私も十五年ご縁を頂戴しておるわけですけれども、今生で最初だという気持ちも忘れてはいけません。何事も初ごとだという気持ちで聞かないといけませんし、もしこれが今生で最後のご縁だと思うと、これどうでしょうね、万感胸に迫るようなものがあるのではないのでしょうか。そういう気持ちで日暮らしができたらこれはとても今日の天気のように輝いて日暮らしができる。あれも

困った、これも困ったとなにか暗い気持ちでなくて、今言ったような気持ちで持てたらとても尊いのではないかと私は思っております。

### 彼岸と此岸

今日はお彼岸でしょう。お彼岸のお中日、お彼岸というのは元々これインドの言葉があつて、中国あつて、ずっと三国を伝来してきた謂れがあるわけです。インドではお彼岸のことを波羅蜜、波羅蜜多といいます。インドの言葉で聞いても私たちが

分かりませんよね。でもお釈迦さまはお彼岸のことを波羅蜜、あるいは波羅蜜多、パラミタとおっしゃつた。パラというのとは完全な、ミタというのはその世界へ至るという意味です。波羅蜜あるいは波羅蜜多という言葉は鳩摩羅什という三蔵法師が翻訳してくださつて、これを至彼岸と翻訳していただいたのですよ。これを中国で、鳩摩羅什などの三蔵が波羅蜜とは、完全な、最高に素晴らしい世界に至ると訳され、これを日本では「至」を省略して彼岸とこういつておる。

彼岸には反対の言葉があつて、これは此岸という。私たちが生活して居る処はこちらの此岸ですよ。それに対して向う岸がありますよということをお教えくださるのが彼岸ですから、川を挟んで、あるいは海を挟んで向う側です。もしね、向う岸がある、彼岸があると気がつかなくつたら私たちが此岸、この岸にいますということも気がつかないのですよ。向う岸があるから、こちらの岸の生活はこうだなどということ

井の中の蛙大海を知らずという諺がありますよね。井戸の中にいるカエルは広いぞと思つていてもその中だけです。外にはもつと広い世界の海原があると思つたら、井戸の中の生活はなんて小さいものかと気がつきますよ。もし出なかつたら気がつかない。また、鳥なき里の蝙蝠という言葉もありますよね。コウモリは空を飛べるのは私だけだと思ふけど、鳥に会つたら、私はコウモリなんだと気づく。彼岸、私たちを超えた世界がありますよ。本当の意味は、最高の、

最も優れた、この上ない、そういう完成された世界。私たちは何か色々やっておるけれども、もうちょっと何かせんといかんというのはいっぱいありますよね。もう出来上がった、理想の世界だというのが波羅蜜。パラミタ。私たちはそういう世界を思い浮かべることによって、自分の世界がいかに不十分なものかというのを気づかかせていただく。それを分かりやすい言葉で言えば、井の中の蛙大海を知らず、それはまさしく波羅蜜のことをいっている。それに気づいて私は井の中にいるんだなということに気づかさせていた

く。そして、今日はお中日でお太子さんの法要が勤まる。どうしてお中日なのかと思ったら、浄土三部経の中に『観無量寿経』というお経があります。その中に韋提希という女性が、息子は言う事をきかんし、娑婆にいたら色々あって大変だ。最高に完全な世界に私は行きたい、あるいはそれを思い浮かべたいと言った時にお釈迦さまはどうおっしゃっていたかという、今日はお彼岸の中

日だから太陽は真東から出て、真西に沈む。だからどうぞその西に沈む太陽を見て下さいと。目を開けていても、目を瞑ってみても見えるようにしてください。そういうことが観無量寿経に書いてあるんです。そうしたら善導大師が、今日は尊い日だから完全なる世界、お浄土の世界を思い浮かべるには一番いい日だということをお示しいただいて、それからずっと今までこういうお彼岸が続いておるのですよ。インドではそういう理想の世界をパラ、完全な理想の世界を向うの岸に至るところにいる。それを私たちは、お彼岸といいつもそういうことを思い浮かべないといけませんね。今日だけで明日から忘れたということだと、これは寂しいことですね。そういうことをいつも思い浮かべる。ですから観無量寿経には「閉目開目」と書いてある。目を開いてみたら真西に太陽が沈んでいくということが見える。でも閉目、目を瞑っても見える。これは素晴らしいことではないでしょうか。そうならないとやっぱ駄目



なんじゃないかなと思うんですね。私たちの日常の生活、此の世界、それに対して完全な世界、彼岸がありますよと。

### 聖徳太子のお言葉

聖徳太子、お太子さん、こちらには十七歳の御像が出ておりますけれども、いろんな言葉が残っておりますね。大体三つぐらい。聖徳太子が病気になるで見舞いに行った。したら聖徳太子がどうおっしゃったか。お金はね、すぐに無くなるよ。

でも仏法は無くなりませんよと、こうおっしゃった。財物は滅びる。でも仏法は絶対に滅びませんよ。息子さんがそれを書き記して大安寺というお寺の銅板に彫り込んであるんですよ。お太子さんからこういうことを聞きましたと。お金があっても無くなるけれども、仏法は無くなりませんよ。これは永遠のものですよとおっしゃった。その聖徳太子をお札の肖像に描いてありましたね。あれは大蔵省か財務省か、聖徳太子のお言葉を知って描いたのかなとも思う。あのお札のところに財物は滅びますが、仏法は滅びませんよと書いてあるとお金に対する見方がちよっと変わってくるなど私は思うのですけどね。その息子さんはそのことは大事だと、紙に書いたら無くなるかもしれないから銅板に彫って残した。

もう一人の息子さん、山背大兄王、ご長男です。ご長男へはどう言ったか。悪いことはするな、良いことをしなさいと。「諸悪莫作 衆善奉行」。心を綺麗にせんといかん。これをまた山背大兄王が書き残してくれた。

もうひとつ、これは奥さん、お后さまへの言葉。これは皆さんもよくご存じのとおり、「世間虚仮唯仏是真」。この言葉はよく知られておるけれども、ちよつと誤解されているかもしれない。世間は虚しいもので仮のものですよ。仏法の世界は真ですよとこういつておる。私たちは、そういう言葉を聞くとどう思ふかといつたら、ああ娑婆は駄目だな、仏さんの世界に行かんなんなど、こういう風に思うでしょう。そしたらこの娑婆で生きておれなくなりますがよね。聖徳太子は摂政として推古天皇に代わつて政治をなさつておられた。それではそんな世間虚仮のところで政治をなさつておつたらどうするのでしょうか。一方で仏法の手を合せて、そしてお経の解釈をなさつたり、十七条の憲法をお作りになつたりしておる。これどうするんだということになります。

大事なことは世間虚仮というのはこういう風な物事を見るんですよ、仏法の世界ではこういうことを教えられているんですよとこういつているんですよ。この二つを、こつちが善い

悪いという話がややこしくなるんですよ。世間というものはどういふものか。みんな二つに分けて物事を考える。分かりやすいのは、損か得かでしょう、楽か苦かでしょう。究極は二つに分けた考え方の象徴的なものは生死ですよ。生きていくか死ぬか、これを二つに分けているわけですよ。皆さん、今お元気でにこやかにいらつしやる。でもやがて死ぬかもしれない。いや必ず死ぬんですけれども。これだけは間違いない。生と死と二つに分けて考えている。こちらは良いな、こちらはいらんなところ考えるわけですよ。今日、私は車で来ましたが歩いても、歩いてくるとちよつと苦しいな、それで車で来るわけですよ。必ず何か二者択一の選択をしておりますよ。苦か楽か。損か得か。善いか悪いか。そういう風に二つに分ける究極のものが生死です。

### 生死いづべき道

ですから親鸞聖人も悩まれたんですよ。比叡山で修行なさつたけれども、これで善いのか悪いのか。いつ

悟りが開けるのか開けないのか。死んだらどうなるんだ。親鸞聖人の奥様は書いておられる「生死いづべき道」と。生死いづべき道というのは、そういうものを超えた世界。その世界とは彼岸の世界。この彼岸の世界はどうかと二つに分ける。二つに分けることを私たちは分別とこういつているんですよ。ゴミを燃えるゴミと燃えないゴミに分けること、これは大事なことですよ。苦か楽か。これを二つに分けると、これが楽やなと思つても他所にもつと楽があつたら、なんだこれはと成る。どこまで行つてもとめどなく迷い続けなくてはならない。これを迷いという。生死の迷いといつたら生き死にの迷いではない。要するに物事を二つに分けて、必ずどつちが良いかとなる。仮にこれが良いとしても、他所を見たら必ず上があるわけですよ。そしてまた駄目だ、昨日まで良かったのに満足できない。そして腹が立つ。

そういう気持ちを仏教ではどういつているかといつたら、貪欲と瞋恚といふわけですよ。貪欲とはもつと欲しい、もつと良いものが欲し

い。瞋恚は要らんものはあつちいけ、あつちいけという。三毒の煩惱。貪りと怒り、そして愚痴。そういう風に分けるのを愚痴というんですよ。物事を正しく見ることができないというのが愚痴。難しい言葉で貪欲だ瞋恚だ愚痴だといくらでも辞書や本にでも書いてあるけれども、要するに好きな物もつとちよつと嫌いなものはもういりません、そういうふうに分けるのを愚痴といひます。それが貪欲・瞋恚・愚痴という三つの煩惱。それがこの此岸、私たちの世界だ。

彼岸はどうか。そういうものは二つに分けられないんですよ。生死は不二だと。分けられるなら分けまですよ。死はいらぬ。あつちいつてちよつと良いかもしれないが、生まれた時から生死は二つ一緒になんですよ。でも都合の良い所で分けるのが凡夫というものであり、煩惱です。その気持ちが私たちを迷わせているわけですよ。それも止めどなく迷うんですよ。仮に満足してもまたちよつとしたらまた次の物ができてきて、毎日毎日、それが生死を繰

り返す。生死といったら生き死にではなく、物事を二つに分けて考える。片方を取り、片方を捨てようとするその気持ちが、娑婆の一番の根本なことです。

く さ む す び

親鸞聖人も若くして比叡山に行かれたけれども、そういう悩みがあったわけですよ。それを後で奥さんに語っておられる。生死を超える道が問題であったと。生死といったら死ぬのが嫌だなといった気持ちが起る、それも入りますよ。でも問題は日常生活の中でみんな二つに分けて考えているということです。あなたも良い、あの人も良いと言っているけれどもっと楽に生活できるはずですよ。そういうふうな生き方ができない。反対にそういうふうな生き方ができるのが真だということはおるんですよ。だから仏の世界とは二つに分けない。不二。二つでありながら一つなんですよというふうに見ることがができるのが仏の世界ですよ。

この間、小学校四年生の詩にこう書いてあった。「みんなで遊んでい

石を拾って掃除をしなさいと言われてたら、運動場は広い広い。」遊んでいる時は狭い狭い、もっと広い運動場があるのに、うちの運動場はなんと狭いと愚痴ったわけですよ。でも今度はみんなで石を拾って草をむしって綺麗にしましょうと言ったら

運動場は広い広いところなる。でも運動場は広くなったり狭くなったりしますか。掃除する瞬間に運動場がバババツと広くなっていた。遊ぶ時にドドドツと狭くなったというのであれば、狭い狭い、広い広いところ愚痴るかもしれません。でも運動場は一つですよ。狭いとか広いとか言っておるけれども運動場は一つですよ。一つのものを二つに分けているわけですよ。そうするとより広い運動場があるじゃないか。こんな広いところは嫌だということになる。迷いや悩みが起こってくる。これをひとことと言うと先ほど言った三毒ですよ。狭いな、もっと広い方が良いなというのが貪欲。掃除するのは嫌だな、これは瞋恚。一つの運動場なのに見方によって変わっていることに気づかない。みんな自分の都合

よって分けています。物事を正しく見る事をできない、それを愚痴という。彼岸の世界は二つに分けて見ない。正しく物事を見る。これが真。だから聖徳太子はこの娑婆を捨ててどっかへ行きなさいとおっしゃっているのではないですよ。この娑婆は、世間の眼鏡で二つに分けてしまう世界。仏の眼で見ると、そうではなく一つ。

今、今しかないんですよ。今、今日幸せに生きていることが尊いんだけれども、もっと先に良いものがあるかもしれないと思う。今、浄光寺さんのここにあるんですよ、尊いところが。それなのにどこか他所にもつと良いことがあるかもしれない。あるいはお聴聞したら何か良いご利益があるんじゃないかとこう考えるんですよ。そうすると、もっと良いご利益があそこにはある。もっと良いご利益があそこにもあるとまた悩み始めるわけですよ。

「今」、「茲こゝ」、「只ただ」。ここに尊い世界があるということに聖徳太子は教えている。それを唯仏是真、仏さまの眼から見たらそういう風に見える

ますよということですよ。娑婆の損得の眼で見ると二つに分かれて、ますます悩みが多くなりますよ。運動場の話で私は小学校四年生に教えられた。運動の時は狭い狭い、掃除の時は広い広い。これが娑婆に生きているものの見方。でも仮にその子が仏さんの眼で見たら狭いも広いもない。運動場はひとつ。私はこの運動場で掃除させていただく。運動場で野球をさせていただく。喜べる、感謝ができるかということだと私は思う。そのことをある人は「今よりなきに、茲こゝにぞあるに、只ただこそよきに」(柳宗悦「心偈」より) 只ただは満足できるんですよ。ただ生きているだけでは。もっとハッピーに生きようと、幸いを求めていこうとする。今よりなきに、ここ、浄光寺さんのここ、ここにぞある。今、ここ、ただ。ところがただとは思えないで、必ずそう考える。

### ひいおばあちゃんの言葉

この間ね、去年お話ししたことをわざわざ大拙館に住職さんが届けてくださったんですよ。それを見て、

金沢市の高田俊彦さんのおばあちゃんの話を見せていただいたことを思い出しました。それを読んだ時に感動したんですよ。あつ、こんな生き方をなさっている方がいるんだなあと。感動したことを自分だけのものにしてはいけない。みんなで喜んで共感しないと。

このお話は昭和二十八年四月の話です。高田俊彦さんのひいおばあちゃんの話です。「今日、私はお浄土に参らせてもらうよ」とおっしゃったんですよ、夜の十時に。そしてみんなに「ありがとう」と言っていて十二時前に亡くなったんですよ、お念仏を称えながら。私だったら病院で測ってもらわないと分からないかもしれないけど、このおばあちゃん

は自分で分かった。隣の部屋で寝ておった高校二年生のひ孫に「今日私浄土に参らせてもらうよ」と。そしてみんなにお礼を言った。さらに往生するということは特別なことではないのですよと、その子供に語ったというのです。そしてそのひ孫のお母さんと呼んで「あなたにはずいぶん世話になった」と。手を握って「あ

りがとう、ありがとう、ありがとう」と感謝された。その後、お父さんが出てきて、みんなでお念仏を称えた。なまんだぶ、なまんだぶと。そのうちおばあちゃんのお念仏の音が途絶えた。おばあちゃんお浄土へ往生されたですよ。それでお仏壇でみんなでお勤めをした。

礼を言うて、お念仏をして、往生された。その後みんなでお勤めをした。私はこの文章に接したときに非常に感動した。これを浄光寺の皆さんにお聞きいただきたいと思って去年お話させていただいたようです。ところがその後、自分の部屋を片付けていると、古い本が出てきた



宮田東和

んですよ。その本に高田俊彦さんの別の文章が書いていたんですよ。

高田俊彦さんが七十六歳の時のことです。先ほどは、六十二歳の頃のお話でした。あれから十五年ほどを経て、今度はお母さんのことが書いてある。ひいおばあちゃんと同じようにお母さんの方もまたお礼を言うわけです。

### お母さんの言葉

ちよつと読んでみますとね。「平成八年三月十六日、母やがリウマチによる多臓器不全のため亡くなりました。享年八十一歳だった。数年前から関節の変形で歩行ができなくなつて入院していた。週の半ばと週末には、母を見に行くことが習慣になっていた。」子供達と病院へ見舞いに行ったというんですね。老衰も加わりモルヒネと輸血もそろそろ限界にきました。そういうふうに限界がきたと言われて半年たつて三月十四日、職場に病院から危篤の知らせが入った。見舞いに行ったらお母さんがどう言ったか。ありがとうではなく、また来たか。

「また来たか、もう来るなど言うておいたがに。おらの年取つた妹たちも来たし、お前ら子供も、また来てくれた。何度も危篤や、それ臨終やと、県堺を越えて氷見の病院まで駆け付けてくれて、生きている者の方がおらよりも大変やなあ。」そのお母さんがおっしゃったということですよ。私だったらよう来てくれたと礼を言うと思うけれども、このお母さんは生きている者の方が大変だなと。なぜそのようなことをおっしゃったかというのと、「前から話しておいたとおり、臨終やからと騒ぐことはないぞ。」先のひいおばあちゃんと同じことをおっしゃっているわけですよ。続けて「平生業成やぞ、お文さまにあるやろ。おらはもうお念仏のおかげで正定聚しょうじょうじゆや。だからして、臨終に良いも悪いもない。ひとの臨終をとやかく言うもんでないぞ。」すごいことをおっしゃっている。「おらの臨終は阿弥陀さまにまかせたがや。さあ早う家へ帰つて休んでくれ、運転には気をつけてな。なむあみだ、なむあみだ・・・母はこう言い終えると念仏を称えながら

目を閉じた。「そう言われたからと  
いってもお見舞いに行きますよね。  
お母さんは休んでおつて、「俊、お前、  
まだおつたが。あ、この前、会い  
たい者がおつたら呼ぼうかと言うて  
くれたが、それはいらぬぞ。会う縁  
にある者にはもう会えた。俱会一処  
と言うぞ。」俱会一処、必ず浄土で一

緒になるんやぞと。このお母さんは  
生と死を分けとらんのですよ。どう  
したらこんな気持ちになれるか、大  
変な問題なんだけれども、恐らくひ  
いおばあちゃん姿を見ながらそう  
なつたんでしようね。「これは大事な  
ことやが、お念仏や。お念仏は人そ  
れぞれが戴くもの、無理せんがいい。  
お前もご縁はいただいているのやか  
らな。念仏がひとりで湧いてきて、  
それに押されて親さまの懐にとぼし  
こむ（金沢弁でつきすすむの意）、そ  
んな心になるものや。おらは、そう  
して阿弥陀さまにすっかりまかせて  
しもうたがや。」帰れというもんだか  
ら帰った。「母の言に従い十四日の深  
夜に病院を出た。十六日の朝、病院  
にいた妹から、六時三十九分に往つ  
たのと電話があつた。母の念仏を耳

にしなから、所用で妹が枕辺を離れ  
た間のことであつたと。母の臨終に  
は誰も立会っていない。」お母さん  
がひとりて往生なさつたと書いてあ  
る。死を恐れている様子などひとつ  
もないですわね。

### 平生業成

ここに正定聚しょうじょうじゆやとこうお母さんが  
言つておる。親鸞聖人の時代の前は  
どうであつたか。臨終が一番の問題  
だつたんですよ。臨終に「わあー怖  
い」とか言つておつたら往生できま  
せん。だから臨終に気持ちを整えて、  
乱れないでお念仏を称えて、往生す  
れば浄土へ行きますよと往生伝を読  
むとみんなそう書いてある。でもね、  
凡夫がそんな風に果たしてできます  
か。平家物語を読んでも、侍たちが  
敵につかまるでしょう、そして切ら  
れそうになる。そうしたら暫し待て  
と言ふんですよ。お念仏を称えさせ  
てくれと。乃至十念、十回のお念仏  
を称えるから、なまんだぶつ、なま  
んだぶつ……十回称える、さあ切つ  
てくれと。そういう気持ちでなけれ  
ば浄土に往生できない。でも私たち

の娑婆ではそんな気持ちで往生でき  
るかどうか分かりません。だから親  
鸞聖人は、そうではなくて平生業成  
やと。この現生の中で正定聚を得な  
ければならないとおっしゃつている。  
正定聚とは信心を得るということで  
すわね。信心を得て信心がぶれない  
のを安心あんじんというわけですよ。親  
鸞聖人の前はと言つたか。臨終の  
一念、それは平生のお念仏の百年お  
念仏を称えるより大事だと言申し  
ていた。でも臨終の時に心が乱れて  
いては駄目ですよ。それにひきかえ、  
現生に往生が間違いない、それが正  
定聚。信心が決定けつじようする。決定、ぶれ  
なくなる、これが安心。往生が約束  
される。普段の日に信心をいただか  
なければいけない。

### 聖徳皇のめぐみにて

親鸞聖人や法然上人がこの正定聚  
ということをおっしゃつたわけで  
すけれども、親鸞聖人が八十五歳  
を過ぎてからお書きになつたご和  
讃にこう書いてある。「仏智不思議  
の誓願を 聖徳皇おとうのめぐみにて  
正定聚しょうじょうじゆに帰入して 補処ふしよの彌勒みろくの

ごとくなり」。聖徳皇の恵にて私た  
ちは正定聚に入ることができ。さ  
きほどのお母さんは、私はもう正  
定聚だ。何の生死の心配はないん  
だ。だから見舞いに来ても来なくて  
も大丈夫とおっしゃつた。補処ふしよの彌  
勒みろくとは五十六億七千万年経つたら  
仏さんになるとご和讃に書いてあ  
りますね。次に仏さんになると決  
まつた菩薩さまを彌勒みろくというんです  
よ。この彌勒さまが悟りを開くまで  
五十六億七千万年ですよ。でもその  
前はもつと長い。三大阿僧祇劫あそうぎしやう。劫  
とは数えきれないような長い時間で  
す。その数えきれない時間の無数賠  
を阿僧祇劫あそうぎしやうというんです。それを三  
倍したものが三大阿僧祇劫あそうぎしやう。その  
長い時間を経て、そしてようやく  
彌勒菩薩は次の仏さんになれると  
ころまで到達した。そしてさらに  
五十六億七千万年経つて仏さんにな  
るといふんですよ。親鸞聖人はお念  
仏によつてその彌勒さんと同じ位に  
到達していると。なぜ到達できるの  
か。それは聖徳皇の恵にてだとおっ  
しゃつている。  
こういふご和讃もありますよ。「聖

徳皇あわれみて 仏智不思議の誓願に すすめいれしめたまいてぞ 住正定聚の身となれる」。正像末和讃の中にそう書いてある。聖徳太子さまのご縁によってお念仏に合わせさせていただいたことを感謝なさっておられるのですよ。私たちは親鸞聖人が法然上人に出会ってお念仏の道に入られたと聞いておりますわね。でもその前に言い伝えがあつてね、親鸞聖人は九歳で比叡山に入られたでしょう。親鸞聖人がお生まれになった時代、これは大変な時代だった。その時、京都は大干ばつ。その翌年は長雨によってまた被害が出た。親鸞聖人が四歳の時も干ばつで死者が多数。さらに五歳の時に大きな火事があつた。その様子は方丈記の中に書いてありますよ。その翌年また火事が起こった。さらにその翌年、親鸞聖人が七歳の時、大風が吹いた、洪水、地震が起こった。この時また沢山の人が亡くなった。八歳、平家と源氏とけんかしておるから、お寺が焼かれたり、四月に竜巻が起こった。

そして親鸞聖人、九歳の春に出家なさるでしょう。二年間飢饉が続い

で何も食べるものがなくなった。四月、五月の二か月、京都の左京だけで四万二千三百人の人が亡くなった。亡くなったけど始末できないから道に放置されていた。弔う事も出来ない。火葬することもできない。そんな時に出家をなさった。「明日ありと 思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」。養和元年に親鸞聖人が得度された。

なんとかせんといかん。せめて年号を変えたらいいんじゃないかと考えた。それで養和の年号の後どうなったか。「寿永」、長生きするということでしょう。こういう年号に変えて少しでもみんなが健康で長生きできるように願っている。こういうふうには災害が起こったために年号を変えるのを災異改元というんですよ。親鸞聖人の九十年の生涯の中で全部で十六回そういうことがあつた。まさしくずっと災害の中で生涯を送られた。災害の時にみんなに囲まれて先ほどのおばあちゃんのようにありがたいと言つて往けたら良いんだらうけど、できないとどうするか。そうすると平生業成、そし

て現生で不退、生きている時に信心を獲得していく。親鸞聖人の奥様、恵信尼公が書いてある。法然上人のもとに行かれたのは、生死いづべき道を求めて、そういうものを超えていくためであつたと。ところがその前に親鸞聖人の夢の事を書いたものが残つておるんですよ。三つの夢の記というものがある。

### 夢告

ひとつは真宗高田派の本山に残っている。その夢の事を書いた中に、十九歳の時のことが書いてある。養和元年に出家なさつて、それから十年間経つた。その間一生懸命、仏法の修行をなさつたわけですよ。常行三昧堂の堂僧としてお勤めになつておつた。十九歳の時、南都に行かれて磯長にある聖徳太子のお墓にお参りになつたんですよ。推古二十九年の十二月に聖徳太子のお母さんが亡くなった。そして年が変わつて二月十一日にお后さんが亡くなった。翌日の二十二日に太子が亡くなった。だからみんな同じお墓に入っている。そこに親鸞聖人が十九歳の時にお

参りされたらと伝わっておる。そしてお籠りをされた。わたしたちは六角堂のお籠りのことはよく聞いておるけれども、磯長のご廟の時も参籠された。その時に聖徳太子からお告げがあつた。「聖徳太子、善信に告ぐ、我が三尊は塵沙界を化す。日域は大乗相應の地なり。諦らかに聴け、諦らかに聴け、我が教令を。汝が命根は、まさに十余歳なるべし。命終わりて速やかに清浄土に入らん。善く信ぜよ、善く信ぜよ、真の菩薩を」。あなたの寿命はあと十年ですよ。二十九歳までですよとお告げがあつた。でも死んだ後は浄土へ往生できますよ。どうですか。浄土に往けるから安心できますか。あと十年だから心配になる。なかなか難しい問題ではないですか。恐らく親鸞聖人は聖徳太子のお告げですからそれから十年間は一生懸命修行なさつたと思えますよ、迷いが無いように。その後、正治二年、二十八歳の大晦日の時に今度は比叡山無動寺の大乗院に籠つた。そしてたら如意輪観音が「善いかな善いかな、汝が願い、将に満足せんとす。善いかな善いかな

な、我が願い、亦満足す」とのお告げがあった。自分の善知識に本当に会いたいという願いを持って籠られたら如意輪観音さんのお告げがあった善いかな、善いかな、お前の願いは満足するぞ。あなたの先生、善知識に会えますよと、こういうお告げがあったというんですよ。

そして二十九歳、皆さんご存知のように六角堂に籠られるんですよね。御伝鈔にできますが、「建仁三年歳辛酉四月五日夜寅の時 聖人夢想の告ましましき。彼の『記』にいわく、六角堂の救世菩薩、(中略)善信に告命してのたまわく」。百日籠った九十五日目が四月五日ということ、逆算すると元旦か大晦日に籠られたということでしょう。私たちは夢というフロイトとか予夢とか潜在意識の欲望が現れてくるように思うけども、その時代の人達は夢は神や仏からのお告げだと信じて疑っていないと思いますね。現代人は目に見えるもの、音に聞こえるもの、そういうものだけを信じているわけですよ。でも親鸞聖人はおっしゃっていますよね、はつきり。歎異抄にも

しばしばでてくるけれども「存知せず、存知せずというのは頭で分ったというのが存知でしょう。もう一つは目にも見えないけれどもそれを信じる、それを信知という。

鈴木大拙は「靈性」ということを言った。みんな不可思議な神秘的なことを思うけれども、そういうことではない。暖房があるし、外も暖かいし、これ温かいなあと感じる世界はありますよ。感覚的な世界ですね。あるいは感性とか感情や知性もありますが、それだけではない。鈴木大拙は靈性という世界がありますよと。親鸞聖人の言葉で言えば存知ではなく信知の世界のような世界。そういうようなものに初めて気づいたのが法然上人や親鸞聖人だと『日本の靈性』の中に書いてある。我々は目で見て耳で聞いて、鼻で匂いをかいで、舌で味わって、これらは感覚でしょう。そして意識がある。もつと奥底の所に末那識とか阿頼耶識という意識がありますよということ。天親菩薩の時代からずっと言っているわけですよ。恐らく親鸞聖人もそういうものを感じて、夢のお告げをき

ちんと受け止めて、その通りに生きられたんだろうと私は思っているんですよ。それを大拙先生は靈性。大拙先生の尊いお仕事の一つはそういう世界のことをおっしゃっていたのだことだと私は思っておるんですね。

親鸞聖人も参籠する中で何かを感じ取るものがあつた。そのことがあつて法然上人に会って本願念仏の教えに会うことができたのではないですか。だからずっと遡れば和讃にありますように「聖徳皇のおあわれみの回向に いれしめおわします」。聖徳太子の哀れみによって弥陀の本願の教えによって私たちはお念仏に会うことができる。お念仏に会わなかつたらどうなるのか。五十六億七千万年経っても成仏できるかどうかかわらない。弥陀の本願だからこそ即得往生ができるのだとそういう教えに会わせていただいた、その感謝の気持ちをお彼岸に起こすことができれば大変尊いのではないかと思いますね。本日は長い時間お付き合いました。だきましてありがとうございます。

《編集後記》

◇本文は平成二九年三月二十日、浄光寺「お太子さん」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

\*行事のご案内\*

・「お太子さん」

三月二十一日(彼岸中日)

午後一時～

法話 木村宣彰師

○年中行事

除夜の鐘 修正会	十二月三十一日 一月一日	午後十一時半 午前零時
お太子さん	三月二十一日	午後一時
孟蘭盆会	七月十三日～	午前六時～
追弔会	八月十三日	午前十時
報恩講	十月十七日 十八日	午後一時半・夜七時 午前十時半

◎お知らせ

◆三月二十八日より「きこまいけ」を再開いたします。毎月二十八日にみんなで正信偈を学んでいます。

◆バス旅行のご案内。四月一日(日)、みんな東本願寺「春の法要」(音楽法要)に参拝します。お問い合わせ、お申し込みは浄光寺まで。皆さまのご参加をお待ちしております。